

第110回 三方限古典塾（'15, 12, 17）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 27）

1 炎ほのおに趨はしり勢いきおいに附つくの禍わざわいは、甚はなはだ惨さんにして、亦す甚すみだ速すみやかなり。恬てんに棲すみ逸いつを守るの味は、最たも淡たんにして、亦す最たんも長ちし。 後集 21

（意識） 権力を振るっている者に走り寄り、勢力のある人に付き従うことから生ずる禍は、相手が失脚したときには極めて悲惨なものであり、またそれは非常に速くやってくる。これに対して、無欲の心の安らかさを棲み家として、気楽な生き方を守るとい生活を送る味わいは、きわめて淡泊であり、かつまたその楽しみは永く続く。

（余説） 権力に取り入り媚びへつらうことをやむなしとする立場の人もあるでしょうが、その危うさを戒めています。古人は「座を替えれば人皆同じ」と教えます。その席に座らなかつたか座れなかつた者が他者を責めることは、慎むべきだと考えます。恬淡として気楽に生きる道を選べた人は、それだけでも幸せな人生だった言えるのではないのでしょうか。耳目口腹などの欲望にひかれては、存分の精神修養などできません。

（参考）『孟子』尽心章句下「孟子曰く、心を養うは寡欲かよくより善なきは莫なし。其の人となり寡欲いえどなれば、存すくせざる者有りと雖も寡いえどなし。其の人となり多欲すくなれば、存すくする者有りと雖も寡いえどなし」（寡欲な人に良心のない人はいるがわずかだ）
宋史「能く炎ほのおに趨はしり熱ねつに附つき、人の眉睫びしやうを看みて以もつて推輓すいばんを冀こいねがうか」（まゆ・まつげ）（推す・引く）

2 色欲しきよくは火のごとく熾さかんなれども、一念いちねん、病時に及いばば、便きようち興かんかいは寒灰かんかいに似たり。名利めいりは飴あめのごとく甘いけれども、一いち想しやう、死地に到いたらば、便しやくろうち味は嚼蠟しやくろうの如し。故に、人、常に死を憂うれえ病やまいを慮おもんば、亦い幻業げんぎやうを消して道心を長ながずべし。 後集 23

（意識） 火のように激しく燃え上がる色情も、その時ほんの少しでも、病気に罹おこった時のことを考えたならば、興おこり立つ情念もたちまちさめて冷えた灰のようになるであろう。また、名誉や利益は誰にでも飴のように甘いものであるが、ほんの少しでも死んだ時のことを考えたならば、その興味も、蠟ろうを嚼かむような味気なさになるであろう。したがって、人は常に死について心をいため、病気になった時を意識しておれば、色情や名誉や利益のような幻のごときものに惑まどわされることもなく、真理を追求する志を育て、持続することができるであろう。

（余説） このことはよく分かっているつもりでも、凡人には難しい課題であることは、毎日のニュースで分かります。親鸞聖人も情欲には悩まされ、打ち勝つのは難しかったようです。荘子は「名誉や利益に前にしては、聖人でさえもそれに打ち勝つことは難しい」、孟子も「食欲と性欲は人間の本性である」と書いています。だからこそ、病気になったときや死ぬことについて考えることを薦めています。ラテン語のメモ・モリは、「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」「死を記憶せよ」という意味の警句です。現在のわが国では「生きる力」が強調されますが、避けることのできない「死」について考え学ぶことは重要です。お盆や彼岸は死を考えるよい機会です。

（参考） 荘子・内篇人間世 「名実なじつは聖人せいじんだも勝かつ能よわざる所なり」
論語・子罕篇 「子曰く、吾れ未だ徳を好むこと色を好むが如くなる者を見ず」

3 先を争うの径路は窄し。退き後るること一步ならば、自ずから一步を寛平にす。濃艶の滋味は短し。清淡なること一分ならば、自ずから一分を悠長にす。
後集 24

(意識) 人と争って先んじようとする狭い道はますます狭くなる。一步だけ退いて人に譲って通るようにすれば、その分だけ広く平らになって通りやすくなる。

どんなに美味しくても、こってりしすぎた味にはすぐに飽きができる。ほんの少しでも軽く淡白な味にすれば、その分だけ味わいも自然に永続きして楽しめるものだ。

(余説) このことは、「急がば回れ」や「負けるが勝ち」のような逆説にも聞こえますが、仕事や趣味など生き方全体について適用できることだと思われまゝ。また、私たちには、駅などの階段やエスカレーターで、われ先にと争って昇降するせつかな光景が見られる反面、きちんと列を作って並ぶ美点も備えている国民性もあるところです。

(参考) 菜根譚前集13「径路の窄き処は、一步を留めて人の行くに与え、滋味の濃かなるものは三分を減じて人の嗜むに譲る。此れは是れ、世の渉る一の極安楽の法なり」
前集 17「世に処るには、一步を譲るを高しとなす。歩を退くは、即ち歩を進むるの張本なり」

老子第7章「聖人は、其の身を後にして身先んじ、其の身を外にして身存す」
(考慮の外) (存続する)

4 忙処に性を乱さざらんとせば、須らく間処の心神は養い得て清かるべし。
死時に心を動かさざらんとせば、須らく生時の事物は看得て破るべし。
後集 25

(意識) 忙しい時にその本性を乱し慌てふためきたくないと思うのであれば、ゆったりとした暇な時の心持ちをしっかりと養っておかねばならない。

死ぬ間ぎわになってその心を動揺させ取り乱したくないと思うのであれば、ふだんから物事や身体の在り方をしっかりと見極めておかねばならない。

(余説) 何事も普段の心がけが肝心です。しかし、分かっているけれども難しいのが人情です。一休さんと呼ばれる室町時代の僧・一休宗純と、仙厓さんと愛された江戸時代博多の聖福寺の僧・仙厓義梵の臨終間際の言葉は、どちらも「死にとうない」だそうです。二人とも臨済宗ですが、修行と徳を積んだ二人が、なぜこういう言葉を残したのかは諸説があるようです。例えば、最後まで「死にとうない」と踏ん張るのは勇気のいることで、あきらめることなく、人として生き人として逝く事は、達観した人にしかできないなどです。やや、「柄の無い所に柄をすげる」や「理屈と膏葉はどこへでもつく」感じもします。

自分の死は初体験ですので、その時にどうなるのか予想できませんが、「死にとうない」と慌てふためくのも、悟りなど不可能な自分には相応しいのではないかと思います。

(参考) 論語・里仁「子曰く、朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」

※ 残りのいのちをどう生きて、最後の時をどう迎えるか、のためにお薦めの本です。

「おとなのいのちの教育」水野治太郎・日野原重明・アルフォンス・デーケン 編著 (河出書房新社)

「旅立ちの朝に」曾野綾子・アルフォンス・デーケン (新潮文庫)